2Ka－9

被服形態と着装意識の変遷
－女性の社会進出・女性観の変容に関する視点より－

大分大教育　　村田仁代

目的　伝統的な着装に変化が見られはじめた1960年から今日に至るまでには、その背景に女性の意識や行動の変化、女性観の変容、さらには女性を取り巻く環境の変化が見られるため、現代衣生活の形成を論究するのにそれらを無視することはできない。本論では被服自体の形態変化とこれらの意識の変容との関わりから着装観の変容を検討する。

方法　まず男性の仕事着である背広に準ずるものと見ることのできる女性のスーツを対象として、1960年から1996年の『装苑』の製図からジャケット丈、スカート丈、肩幅、身幅の変化を調査した。次に36年間を4期に分け、各期の被服形態の特徴を比較分析した後、雑誌・新聞記事を渉猟し、その特徴の基盤をなす女性観の変容を考察した。

結果　Ⅰ.1960－66年の「社会進出期」、Ⅱ.1967－75年の「女性解放運動期」、Ⅲ.1976－85年の「国連婦人の十年」、Ⅳ.1986－95年の「均等法以降」の4期間で、被服の各構成部分には明らかに差が見られた。全体を通して見ると、Ⅰ期からⅡ期にかけて短い丈、身体にフィットした傾向を示すが、Ⅲ期には従来より長い丈、身体から離れた大きな傾向となる。さらにⅣ期には再び有意に短い丈、身体にフィットしたものに変化している。構成部分ごとに見ると、スカート丈は全体像の傾向と同様に推移し、ジャケット丈はⅠ期に比べⅡ期以降長くなり、身幅はⅡ期に顕著に小さくなるがⅢⅣ期は同水準で大きくなっている点が指摘できる。しかし、被服形態は期間を経るごとに多様化したことが明らかとなった。特に仕事着においては、女性らしさを否定した従来の傾向から逆にそれを積極的に表現する着装をも採り入れることがⅣ期に決定づけられた。